

試験報告書

近畿大学工学部・建築学科 松本慎也

以下の試験結果を報告します

試験名称	大型間仕切り壁の倉庫業法規準 (2500N/m ²) 耐力性能評価試験											
依頼者	株式会社 佐藤型鋼製作所											
試験体	シリーズ No.	高さ (mm)	ボード仕様			スタッド (t 板厚 mm)			スタッドピッチ (mm)	試験体数		
	1	6500	ハイパーウォール Z			SLGB-100NFB (t1.2)			303	3		
概要	<p>鋼製下地材を用いた大型間仕切り壁の倉庫業法規準 (2500N/m²) に対する耐力性能評価試験を図 1 に示すような 3 等分 2 点载荷試験により実施する。試験では、試験体が破壊に至るまでの荷重および試験体の面外変位、梁中央部の曲率変位を計測するとともに、試験体の破壊性状を確認する。</p> <p style="text-align: center;">図 1 载荷試験方法</p>											
使用機器	<p>荷重計：ロードセル/容量 100kN</p> <p>電気式変位計：変位計 D1/容量 500mm, 変位計 D2~D9/容量 25mm</p>											
結果一覧	シリーズ No.	高さ (mm)	スタッドピッチ (mm)	ボード仕様	試験体スパン L (mm)	積算合計重量 M ₁ (kg)	試験体実測重量 M ₀ (kg)	積算重量相対誤差	実験耐力 P _u * (kN)	実験曲げ耐力 M _u * (kNm)	試験仕様の限界高さ (m)	判定
	1	6500	303	ハイパーウォール Z	6300	294.5	301.0	-0.022	9.45	9.92	6.53	OK
	※同一シリーズにおける 3 試験体試験結果の最小値											
試験実施日	2020年2月2日											

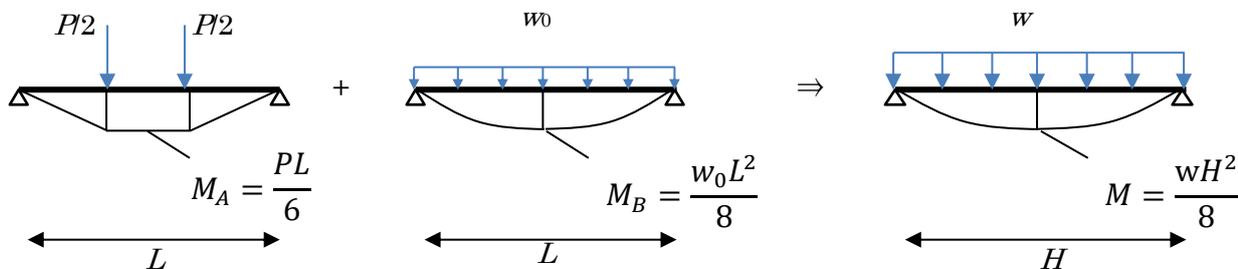


図 2 試験体の曲げモーメントの評価

このとき、試験体の曲げモーメントの評価は、図 2 に示すように、集中荷重による曲げモーメント M_A と自重に対する分布荷重による曲げモーメント M_B との和が評価する高さ H の曲げモーメント M と等しくなるため、次式が成り立つ。

$$M = M_A + M_B \quad (1)$$

よって(1)式から限界高さ H は(2)式のように計算される。

$$\text{限界高さ } H = \sqrt{\frac{8}{w} \left(\frac{PL}{6} + \frac{w_0 L^2}{8} \right)} \quad (2)$$

ここに、 w ：規準分布荷重 ($w = W \times b$) $W=2500\text{N/m}^2$, b ：試験体幅
 P ：実験で求められた耐力値
 L ：試験体のスパン（試験全長から支点のかかり代距離を引いた数値）
 w_0 ：自重に相当する分布荷重

■各スタッドピッチに対する限界高さの算出

【試験体シリーズ No.1（ハイパーウォール Z・H6500-@303）】

実験耐力 $P_u=9.24\text{kN}$ （3 試験体中最小値）

試験体実測重量 $M_0=301\text{kg}$ （3 試験体中最小値）

積算した試験体重量 $M_1=294.5\text{kg}$

内訳：

スタッド重量 2.91(kg/m), t1.6mm ランナー 2.58(kg/m), t1.2mm ランナー 1.71(kg/m)

振れ止め 0.716(kg/m), 固定金具 0.0097(kg/個), 振れ止め本数 5（本）

ボード重量 39kg/m^2 (強化 12.5mm 9.8×2 枚(kg/m²)+ ハイパーハード PB9.5mm 9.7 (kg/m²) ×2 枚(kg/m²))

実測した試験体重量 M_0 と積算した試験体重量 M_1 の相対誤差は-0.022 程度であり、積算に用いた単位重量の数値は概ね妥当であった。そこで、積算によって求めた試験体重量を用いてスタッドピッチのことなる仕様に対する限界高さを算出することとした。

試験体の曲げモーメントの評価は、集中荷重による曲げ耐力 M_A と自重に対する布荷重による曲げ耐力 M_B との和が評価する高さ H の応力状態の M となるものと考え、(2)式に示した計算式から限界高さ H を算出する。

ここに、試験体重量 $M_1=294.5$ kg から

$$w_0=294.5 \times 9.8 \times 10^{-3} / 6.5\text{m} = 0.444 \text{ kN/m}$$

試験体幅 $b=0.303 \times 3=0.909$ m, 倉庫業法規準面圧 ($2500\text{N/m}^2=2.5\text{kN/m}^2$) から

$$w=0.909 \times 2.5 \text{ kN/m}^2 = 2.273 \text{ kN/m}$$

$L=6.3\text{m}$ より, スタッドピッチ 303mm 仕様に対する限界高さ H は次式のように計算される,

$$H = \sqrt{\frac{8}{w} \left(\frac{PL}{6} + \frac{w_0 L^2}{8} \right)} = \sqrt{\frac{8}{2.273} \left(\frac{9.24 \times 6.3}{6} + \frac{0.444 \times 6.3^2}{8} \right)} = 6.53 \text{ m}$$

また, スタッドピッチが@227.5mm の場合, 同様に計算をすると,

試験体重量 $M_1=235.3$ kg となり,

$$w_0=235.3 \times 9.8 \times 10^{-3} / 6.5\text{m} = 0.3548 \text{ kN/m}$$

試験体幅 $b=0.2275 \times 3=0.6825$ m, 倉庫業法規準面圧 (2.5kN/m^2) から

$$w=0.6825 \times 2.5 \text{ kN/m}^2 = 1.706 \text{ kN/m}$$

これらから限界高さを計算すると,

$$H = \sqrt{\frac{8}{w} \left(\frac{PL}{6} + \frac{w_0 L^2}{8} \right)} = \sqrt{\frac{8}{1.706} \left(\frac{9.24 \times 6.3}{6} + \frac{0.3548 \times 6.3^2}{8} \right)} = 7.4 \text{ m}$$

と計算される。

さらに, スタッドピッチが@180mm の場合, 同様に計算をすると,

試験体重量 $M_1=198$ kg となり,

$$w_0=198 \times 9.8 \times 10^{-3} / 6.5\text{m} = 0.2985 \text{ kN/m}$$

試験体幅 $b=0.18 \times 3=0.54$ m, 倉庫業法規準面圧 (2.5kN/m^2) から

$$w=0.54 \times 2.5 \text{ kN/m}^2 = 1.35 \text{ kN/m}$$

これらから限界高さを計算すると,

$$H = \sqrt{\frac{8}{w} \left(\frac{PL}{6} + \frac{w_0 L^2}{8} \right)} = \sqrt{\frac{8}{1.35} \left(\frac{9.24 \times 6.3}{6} + \frac{0.2985 \times 6.3^2}{8} \right)} = 8.22 \text{ m}$$

と計算される。

以上の算定方法は、自重に相当する曲げモーメントが試験では初期状態で必ず作用することから、積算によって評価した試験体重量に対する初期の曲げモーメントの影響は考量しているものの、スタッドピッチが異なる場合でも、耐力値 Pu は実験値 (3 試験体最小値) を用いた算出であり、試験体幅の変化に対しての耐力値は割り増し等は考慮しておらず、一般に安全側の評価であると考えられる。

荷重-変位関係

図3に試験体シリーズ No.1 の荷重-変位関係を示す。

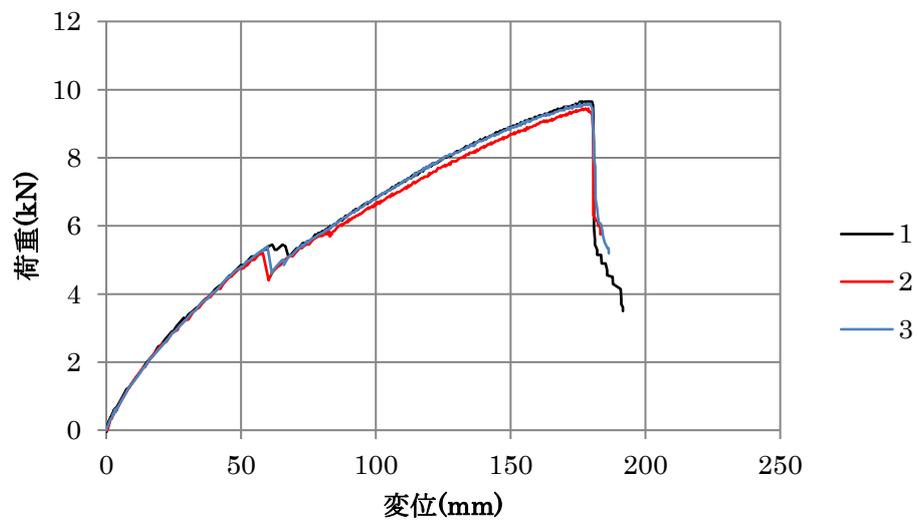


図 3 荷重-変位関係 (シリーズ No.1)

終局状況

各試験体の終局状況を写真1に示す。



写真 1 試験体シリーズ No.1 (#02) 終局状況

表 2 試験結果一覧

シリーズNo.	高さ(mm)	スタッド	スタッドピッチ(mm)	ボード仕様	試験体スパンL(mm)	試験体幅(mm)	試験体連番	試験体質量(kg)	最大荷重Pmax(kN)	最大荷重時変位 δ max(mm)	最大曲げ耐力Mmax(kNm)
1	6500	SLGB-100NFB(t1.2)	303	ハイパーウォールZ	6300	910	01	302	9.65	176	10.13
							02	301	9.45	177	9.92
							03	302	9.60	176	10.08

表 3 試験結果まとめ

シリーズNo.	高さ(mm)	スタッドピッチ(mm)	ボード仕様	試験体スパンL(mm)	積算合計重量M1(kg)	試験体実測重量M0(kg)	積算重量相対誤差	実験耐力Pu(kN)	実験曲げ耐力Mu(kNm)	試験仕様の限界高さ(m)	判定	スタッドピッチ@303での限界高さ(m)	スタッドピッチ@227.5での限界高さ(m)	スタッドピッチ@180での限界高さ(m)
1	6500	303	ハイパーウォールZ	6300	294.5	301.0	-0.022	9.45	9.92	6.53	OK	6.53	7.40	8.22

考察

試験体の最終破壊は、いずれもスタッド断面の振れ止め開口部における局部座屈を伴う曲げ降伏であった。